

教育研究業績書

2023年05月08日

所属：社会福祉学科

資格：助教（臨床）

氏名：浅井 鈴子

研究分野	研究内容のキーワード
児童家庭福祉分野	児童福祉、家庭福祉、児童虐待
学位	最終学歴
修士（林経教育学）	武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科臨床教育学研究

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 日々の業務の中で医療従事者へ実践指導	2016年4月1日2023年3月31日	被虐待児対応の注意点や事実確認の方法また関係機関連携について、医療現場ではまだまだ周知徹底されていないため、事案対応ごとに医療従事者に指導助言を行う。
2. 児童虐待防止医療ネットワーク事業コーディネーター	2018年4月1日2023年3月31日	県内の医療機関に対して、児童虐待対応の相談助言を行う。また、日本子ども虐待医学会が作成した医療機関向け虐待対応プログラム（BEAMS 1）研修を行うことで、病気・怪我の背景にも目を向けるようになった。また、医療機関からの電話相談や出張相談、講演会を実施し、児童虐待（疑い含む）は稀なものではないということを認識し予防支援の視点も持つてもらうよう促した。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 社会福祉士	2014年4月11日	
2. 社会福祉実習指導者	2021年3月14日	
3. 精神保健福祉士	2021年4月5日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 虐待被害次診察技法研修終了	2016年6月18日	
2. 医療機関向け虐待対応プログラムBEAMS（Stage1）	2017年3月19日	
3. 司法面接研修終了	2017年9月18日	
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 家庭児童相談室の専門性に関する研究—2000年の『児童虐待防止法』施行後の歴史の変遷を踏まえて—	単	2020年3月20日	武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科修士学位論文	修士学位論文 主査：倉石哲也教授 2000年の『児童虐待防止法』施行後の歴史の変遷を踏まえて、家庭児童相談室の課題と展望を検討した。
3 学術論文				
1. 学校におけるトラウマインフォームドケアの実践（第Ⅱ報）	共	2020年3月31日	『学校危機とメンタルケア』第12巻、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター	大岡由佳・岩切昌宏・瀧野揚三・浅井鈴子・毎原敏郎・木村有里 学校における児童生徒の対応の中でも性被害・性加害について、対応に苦慮している。筆者らは、X市において、児童生徒の性被害・性加害における教職員の対応についての調査を実施し、あわせてトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care：TIC）を踏まえた

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 学校におけるトラウマインフォームドケアの実践（第Ⅰ報）	共	2020年3月31日	『学校危機とメンタルケア』第12巻、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター	性被害・性加害の研修を行った。研修前後で、性被害・性加害の子どもや保護者への対応ができる効力感が1.5倍から2.4倍に増し、トラウマについての認識（トラウマの経験率/種類/脳・身体への反応/影響）も有意に向上した。TIC実践を行うための研修は、バイオ・サイコ・ソーシャルな多面的な視点からトラウマに関連する内容を盛り込むことに意味があったと考えられた。また、TICの視点を教職員が有するkとが、被害・加害を超えて、それぞれの子どもと向き合える可能性の課題につながっていた。33～44頁 浅井鈴子・岩切昌宏・大岡由佳・瀧野揚三・中村有吾・毎原敏郎 学校における児童生徒の問題行動や課題は、増加傾向にある。それに対応する生徒指導として、トラウマインフォームドケアの視点が、今後必要となってくると考えられる。筆者らはある中学校に対して、トラウマインフォームドケアの視点を導入するために、事例相談と教職員研修を行った。その内容から、トラウマインフォームドケアの視点は、スムーズな生徒指導をもたらすだけでなく、教職員自身のストレスを減少させる可能性があることが示唆された。25～32頁
3. 家庭児童相談室の専門性に関する研究—2000年の『児童虐待防止法』施行後の歴史の変遷を踏まえて—	共	2021年7月	『臨床教育学研究』武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科紀要第27号	浅井鈴子・倉石哲也 2000年の『児童虐待防止法』施行後の歴史の変遷を踏まえて、家庭児童相談室の課題と展望を検討した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 当センター開院後1年間に救命救急センターを受診した小児外傷患者の実態調査	共	2016年7月23日	日本子ども虐待医学会	川崎英史・小林喜実代・浅井鈴子・濱野由起・井上美智子・石原剛広・毎原敏郎 児童虐待（疑い含む）として対応の必要な子どもが「外傷」として救急外来を受診することが多いが、対応するスタッフの経験不足や時間の制約などで、事故予防や虐待対応の観点でかかわることが難しい。そのため専門部署を立ち上げているが、医療従事者から報告連絡が入らないなど児童虐待を疑う患者の把握には問題点があるため、症例を抽出して問題点と課題を検討した。
2. 小児科臨床法医外来開設の報告～児童虐待対応での法医の役割～	共	2017年8月5日	日本子ども虐待医学会（ポスターセッション）	主田英之・浅井鈴子・井上美智子・毎原敏郎 小児科臨床法医外来開設の報告の中で、児童虐待対応での法医の役割について報告をした。一般的に法医は亡くなられている方の診察となるが、臨床法医外来では、身体的虐待の疑いのある方が、どのようにけがをしたのかを法医学の視点で診察を行い、一般診療とはまた違う視点から社会的診断情報と合わせて、外傷の経緯を診た。結果、臨床医と法医との間で明らかな意見の乖離は認めなかったが、外傷に関しては臨床医と法医という異なる視点で評価するシステムを構築することで、より適切な対応が可能となる考えられた。
3. 全身に原因不明の新旧混在する出欠班を認め基礎疾患の存在が疑われる2歳男児の一例	共	2017年8月5日	日本子ども虐待医学会	川崎英史・浅井鈴子・毎原敏郎 全身に原因不明の新旧混在する出欠班を認め、基礎疾患の存在が疑われる2歳男児の一例について、医学的な除外診断と福祉的な社会診断を行い、児童虐待による出欠班ではなく、疾患による出欠班と結論づけた。
4. Child non-Death Review (CnDR) の勧め	共	2019年7月27日	日本子ども虐待医学会	毎原敏郎・浅井鈴子・川崎英史 小児の死亡事例検証ではしばしば指摘されているのは、関係機関の連携不足である。これは現場では常に生じている問題であるが、死亡に至らないと検証は行われなかった。今回は他機関で事後検証会議を開催したので、その意義について報告をした。
5. 医療者と他機関を結ぶBEAMS～医療者以外にお届けする虐待医学の基礎知識～	共	2022年12月10日	日本子ども虐待防止学会大28回学術集会	
3. 総説				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2023年		日本子ども虐待医学会会員		
2. 2023年		日本社会福祉学会会員		
		日本子ども家庭福祉学会会員		